

3. 事業概要

(1) 常設展

常設展示室（展示室A・B）は全体で5室の構成となっている。第1室は「山梨の文学風土」と「樋口一葉」コーナー、第2室は「山梨出身ゆかりの作家と作品」、第3室は芥川龍之介コーナー、第4室は飯田蛇笏・飯田龍太記念室として年4回春夏秋冬に一部の資料の入替えを行っている。第5室は山梨出身・ゆかりの作家104名をジャンルごとに年2回入替えて紹介している。

以下の資料一覧には、令和6年3月5日（火）～令和7年3月2日（日）の間、常設展に出品した資料すべて掲載した。

第1室

期間限定公開

◆ 春の常設展 3月5日（火）～6月2日（日）

深沢七郎 生誕110年

愛用のギター 瑞雲と古稀

深沢七郎選集出版記念ギターリサイタル ポスター

「ギター独奏集 祖母の昔語り」レコード 1973（昭和48）年 日本コロムビア

深沢七郎「櫛山節考」原稿・草稿

高橋忠弥 画『櫛山節考』（1957年 中央公論社）装幀原画

深沢七郎「笛吹川」草稿

谷内六郎 画『笛吹川』（1958年4月 中央公論社）装幀原画

映画「笛吹川」ポスター・パンフレット

深沢七郎 井伏鱒二宛書簡 1968（昭和43）年3月10日

「井伏先生と共に」草稿

「中央公論」第71年第12号 1956（昭和31）年11月

深沢七郎『深沢ギター教室 あなたも「禁じられた遊び」が弾ける』1973（昭和48）年7月 光文社

◆ 夏の常設展 6月4日（火）～8月25日（日）

虚子と富士北麓の俳人たち 高浜虚子生誕150年

新蕎麦会虚子選句稿 1942（昭和17）年8月22日

新蕎麦会山中虚子山荘句会投句稿 1951（昭和26）年8月1日

新蕎麦会山中虚子山荘句会出席者名簿 1951（昭和26）年8月1日

◆ 秋の常設展 8月27日（火）～12月1日（日）

生誕130年 田中冬二と山梨

田中冬二「山郷」草稿

田中冬二創作ノート 1929（昭和4）年以前

田中冬二詩ノート6

田中冬二「山峡二景」草稿

田中冬二「本栖村」色紙

「山郷」文学碑拓本

田中冬二『青い夜道』1929（昭和4）年12月 第一書房

◆ 冬の常設展 12月3日（火）～3月2日（日）

山崎方代 生誕110年

山崎方代「丸出しの甲州弁で申します花は死であり死は花である」額装

山崎方代「折から甲斐路の春は深く天まで桃の花盛りなり」額装

山崎方代「ことごとと雨戸を叩く春の音鍵をはずして入れてやりたり」軸装

山崎方代「冬の日が真綿のやうに射しこんで大正三年も遠くなりたり」短冊

山崎方代「まつ黒くすみたる馬の目の中に釜無川が流れている」短冊
山崎方代「ふるさとの右左口邨は骨壺の底にゆられてあが帰る村」色紙
山崎方代「ゆえ知らぬ涙は下る朝の陽が茶碗の中のめしを照せり」短冊
山崎方代「茶碗の底に梅干の種が二つ並びをるこれが愛というものなのだ」短冊
山崎方代「一ひらのさくらの花が流れ来て黒き机の上にとまれり」短冊
山崎方代「寂しくてひとり笑えば茶ぶ台の上の土瓶が笑い出したり」短冊
山崎方代「手の平をかるくにぎつてこつこつと石の心をたしかめにけり」短冊
山崎方代「茶ぶ台の上の土瓶に心中をうちあけてより楽になりたり」短冊

山梨の文学風土

◆ 甲斐のうた（パネル展示）

酒折の宮／塩の山・差出の磯／都留の郡／甲斐の牧

◆ 甲州の紀行文

深草元政『身延道の記』元禄17年刊
荻生徂徠『徂徠集』巻之十五 元文元年序文「峡中紀行」収録（複製）
賀茂季鷹『富士日記』文政6年刊

◆ 甲府学問所 微典館

乙骨耐軒「微典館学頭勤務割」
甲府勤番支配宛 微典館学頭任命通知書
乙骨耐軒「維新亭齋詩」三集 上・下
乙骨耐軒「甲役途中詩」
乙骨耐軒「維心亭齋詩初稿付外集」

◆ 国学を学んだ人々

萩原元克編『甲斐名勝志』天明3年9月刊
萩原元克「うまひとのとひきまさずばいたづらに庭の真萩はちりゆかましを」短冊
本居宣長点 辻守瓶「春十首」和歌
本居宣長点 辻守瓶「万葉の集見ずして歌」一枚物
万葉和歌集 巻第二十

山梨出身・ゆかりの作家と作品

樋口一葉（ひぐち いちよう）

樋口一葉「水石契久 さゞれいしの昔よりして契りけん岩ねをめぐるたに河のみづ」短冊軸装
樋口一葉「にごりえ」草稿
樋口一葉 伊庭隆次宛書簡 1893（明治26）年4月24日
樋口一葉筆 手習い帖「徒然草」
樋口一葉 詠草 1895（明治28）年9月
樋口一葉「本郷五丁目」草稿軸装
樋口一葉 雨宮源吉宛書簡 1890（明治23）年7月
樋口一葉 古屋よし宛書簡 1890（明治23）年7月
写真パネル 次兄・虎之助、父・則義、長兄・泉太郎
写真パネル 母多喜・奈津（7歳頃）・姉ふじ・妹くに（本郷6丁目5番屋敷時代）
写真パネル 萩の舎集合写真
写真パネル 半井桃水
写真パネル 竹内桂舟 画「うもれ木」第7回挿絵
写真パネル 文学界同人
写真パネル 一葉女史の碑建碑の日 1922（大正11）年10月15日
下村為山 画 樋口一葉肖像（複製）
「五千円」券（A000006A）、（LD8999979J）
樋口虎之助作 薩摩焼絵付皿（東海道五十三次）

青海学校二級后期卒業證書
樋口一葉「ゆく雲」未定稿〈複製〉
筆立て
こうがい・根掛け・筋立
短冊ばさみ
馬場孤蝶編『一葉全集』前・後
「文藝倶楽部」第2巻第5号 1896（明治29）年4月
「太陽」第1巻第5号 1895（明治28）年5月

◎県立美術館特別展「超絶技巧、未来へ！」関連展示 11月15日（金）～令和7年2月2日（日）

樋口虎之助作 薩摩焼絵皿「東海道五十三次 品川」
樋口虎之助作 薩摩焼金欄手花瓶
樋口一葉筆「三尺の細口臺付龍耳の花瓶」図
樋口一葉「うもれ木」未定稿
「都の花」第95号 1892（明治25）年11月20日
樋口一葉 感想・聞書9（残簡その三）

第2室

井伏鱒二（いぶせ ますじ）

井伏鱒二「近逢春時」額装
井伏鱒二「はなにあらしのたとへもあるぞさよならだけが人生だ 花発多風雨 人生足別離」額装
井伏鱒二「虹のいろいろ」原稿
井伏鱒二「あの山は誰の山だどっしりとしたあの山ハ」軸装
井伏鱒二「富士には月見草がよく似合ふ」軸装
井伏鱒二「蛍の季節」原稿
井伏鱒二「今宵は仲秋明月初恋を偲ぶ夜」軸装
井伏鱒二「あきのおんたけ こゝのつどきに ひとりのぼれば はてなきおもひ」軸装
井伏鱒二「さびしい庭にまつかさおちてとてもおまへはねにくうござろ」色紙
井伏鱒二「まことによろし」軸装
井伏鱒二「なだれ」色紙額装
井伏鱒二「山みちのかたはらに水たまりあり手洗ふと立てば涙水に落つ」色紙
井伏鱒二「旧・笛吹川の址地」原稿〈複製〉
井伏鱒二「頓生菩提」原稿〈複製〉
井伏鱒二「波高島」原稿〈複製・原本 川内まごころ文学館蔵〉
井伏鱒二 画 絵付け皿
井伏鱒二『厄除け詩集』1937（昭和12）年5月 野田書房
井伏鱒二『黒い雨』1966（昭和41）年10月 新潮社
井伏鱒二『ドリトル先生アフリカ行き』1941（昭和16）年12月 フタバ書院
写真パネル 取材のため下部温泉を訪れた井伏

太宰 治（だざい おさむ）

太宰治 井伏鱒二宛書簡 1938（昭和13）年10月25日消印〈複製〉
太宰治 井伏鱒二宛書簡 1938（昭和13）年8月11日
田邊茂一「太宰君の死」原稿
太宰治「わが名は狭き門の番卒」色紙
井伏鱒二「太宰君」原稿
小田嶽夫「太宰君の『奉仕』」原稿
河上徹太郎筆「太宰御坂に鎮まるの日」色紙
太宰治 青木辰雄宛葉書 1945（昭和20）年10月30日〈複製〉
太宰治「ア、秋」原稿〈複製〉

写真パネル 甲府市水門町（現・朝日1丁目）の石原家玄関横で 1939（昭和14）年元旦
太宰治御坂峠文学碑「富士には月見草がよく似合ふ」拓本軸装
太宰治『晩年』1936（昭和11）年6月 砂子屋書房
太宰治 高田英之助宛書簡 1939（昭和14）年1月17日〈複製〉
太宰治『右大臣実朝』1943（昭和18）年9月 錦城出版社
太宰治『富嶽百景』1943（昭和18）年1月 新潮社
太宰治「ヴィヨンの妻」原稿〈複製〉

檀 一雄（だん かずお）

檀一雄「不思議やな此処にして坪にも足りぬ鎮魂の仮現の憩ひ」一枚物
檀一雄「女子共ハ毛梳きてあらむ河明に柳の影もそよぎてあらむよ」色紙
檀一雄 檀とみ「観樹経行」一枚物
玉井徳太郎 画『少年猿飛佐助』挿絵原画
檀一雄「天魔いくつ通り過ぎたる地ベタ哉」色紙
檀一雄「痩せ脛の尚よろけ行く秋の風」一枚物
檀一雄「娘達への手紙」原稿
檀一雄「モガリ笛いく夜もがらせ花に逢はん」色紙
檀一雄「魂きはる命の限り見てしがな青海原の断崖に坐す」一枚物
檀一雄「わが顛落」原稿
檀一雄「潮騒や磯の小貝の狂ふ迄」色紙
檀一雄「太郎生後九十四日」額装〈複製〉
檀一雄「旅立ち」原稿〈複製〉
檀一雄「父子来迎」原稿〈複製〉
檀一雄『リツ子・その愛』『リツ子・その死』1950（昭和25）年4月 作品社
檀一雄『火宅の人』特装本 1979（昭和54）年6月 新潮社
映画「火宅の人」ポスター 1986（昭和61）年 東映
檀一雄『長恨歌』1951（昭和26）年3月 文藝春秋新社
檀一雄『真説石川五右衛門』1951（昭和26）年9月 新潮社

山本周五郎（やまもと しゅうごろう）

映画「椿三十郎」ポスター 1962（昭和37）年 東宝
山本周五郎「多忙」原稿
映画「赤ひげ」パンフレット 1965（昭和40）年 東宝
映画「さぶ」ポスター 1964（昭和39）年 日活
山本周五郎「おさん」原稿
映画「ひとごころし」ポスター 1976（昭和51）年 永田プロ・大映・映像京都提携作品
山本周五郎「駈込み訴え」原稿
写真パネル 浦安時代 撮影 林忠彦
写真パネル 1936（昭和11）年正月に馬込の自宅前にて 撮影 秋山青磁
写真パネル 芝生の上で 撮影 秋山青磁
写真パネル 書斎 間門園にて 撮影 秋山青磁
島津恭二「静春想」草稿〈複製〉
和泉比呂詩「五月の野辺」草稿〈複製〉
清水きよし「酔漢とその細君」草稿〈複製〉
山本周五郎「青べか物語」原稿〈複製・原本 神奈川近代文学館蔵〉
山本周五郎「わが野鳥たち」原稿〈複製〉
山本周五郎「夏草戦記」原稿〈複製〉
山本周五郎『山彦乙女』1952（昭和27）年2月 朝日新聞社
山本周五郎『樅ノ木は残った』1969（昭和44）年8月 講談社
山本周五郎『季節のない街』1962（昭和37）年12月 文藝春秋新社
山本周五郎『赤ひげ診療譚』1959（昭和34）年2月 文藝春秋新社
「講談倶楽部」第11巻第9号 1959（昭和34）年5月

深沢七郎（ふかさわ しちろう）

深沢七郎 井伏鱒二宛書簡 1968（昭和43）年9月9日
深沢七郎 川久保正郎宛葉書 1957（昭和32）年10月31日
深沢七郎「人間嫌い」原稿
写真パネル ギターリストの頃
写真パネル 夢屋にて 撮影 佐藤真樹
写真パネル 笛吹市石和町の甲運亭にて 1976（昭和51）年4月6日
写真パネル 1957（昭和32）年1月 提供 中央公論新社
写真パネル 映画「笛吹川」のロケの折に、坊ヶ峯で木下恵介監督（右）と、1960（昭和35）年
横尾忠則 画 夢屋ポスター
深沢七郎「櫛山節考」原稿〈複製〉
深沢七郎「笛吹川」草稿〈複製〉
深沢七郎「言わなければよかったのに日記」原稿〈複製〉
深沢七郎『櫛山節考』1957（昭和32）年2月 中央公論社
深沢七郎『笛吹川』1958（昭和33）年4月 中央公論社
深沢七郎『甲州子守唄』1965（昭和40）年3月 講談社
映画「笛吹川」ポスター 1960（昭和35）年 松竹
映画「笛吹川」パンフレット 1960（昭和35）年 松竹
映画「笛吹川」台本 1960（昭和35）年 松竹

山崎方代（やまざき ほうだい）

山崎方代「托鉢のわらじのひもも太くして鎌倉山の春はゆるめり」軸装
山崎方代「折から甲斐路の春は深く天まで桃の花盛なり」軸装
山崎方代「不二が笑つてゐる石が笑つてゐる笛吹川がつぶやいてゐる」軸装
山崎方代「一ひらのさくらの花が流れ来て黒き机の上にとまれり」短冊
山崎方代「返り咲くさくら水仙黄梅花寺はあまねく春となりたり」他短歌原稿
山崎方代「茶碗の底に梅干の種が二つ並びをるこれが愛というものだ」軸装
山崎方代「ゆえ知らぬ涙は下る朝の陽が茶碗の中のめしを照せり」短冊軸
山崎方代「茶の花の咲ける小径をらんららん少女が一人今降りて来る」軸装
山崎方代「ほんとうの酒がこの世にあつた時父もよいにき吾もよいたり」短冊
山崎方代「まつ黒くすみたる馬の目の中に釜無川が流れている」短冊
山崎方代「土びんの話」草稿
山崎方代「ふるさとと右左口軒は骨壺の底にゆられて吾が帰る村」軸装
山崎方代「父母のふるさとに来て腹赤き蟹の子供を吹き散らすなり」額装
山崎方代「ゆえ知らぬ涙は下る朝の陽が茶碗の中のめしを照せり」色紙
山崎方代「亡き姉よ今御嶽の頂にのぼりて昼の星見けたり」短冊
山崎方代「ある朝の出来ごとでしたこおろぎがあがかけ茶碗とび越えゆけり」扇面色紙
山崎方代「瑞泉寺和尚」草稿
山崎方代「そこだけがたそがれていて一本の指が歩いてゆくではないか」額装
山崎方代「何にごともなかつたように一本の杉は季節の花をつけたり」軸装
山崎方代「宿無しの吾の眼玉に落ちてきてどきりと赤い一ひらの落葉」色紙
山崎方代「方代の一日が暮れて朝が来て又ふあふあと日が闇けてゆく」色紙
山崎方代「ふみはずす板きれもなくとぼとぼと六十の坂下りてゆく」短冊
山崎方代「わたくしはこのような歌が好きである」草稿
山崎方代「おそろしきこの夜の山崎方代を鏡の奥につき落すべし」軸装
山崎方代「榎の実をころがしながら」草稿
山崎方代「くろがねの鏡の奥にうずきおる心の程を見るべかりけり」軸装
愛用品 眼鏡、ルーペ、『広辞苑』
山崎方代『方代』1955（昭和30）年10月 山上社
山崎方代『右左口』1973（昭和48）年12月 短歌新聞社
山崎方代『こおろぎ』1980（昭和55）年11月 短歌新聞社

山崎方代『青じその花』1981（昭和56）年12月 かまくら春秋社
山崎方代『迦葉』1985（昭和60）年11月 不識書院
写真パネル 方代艸庵にて 撮影 湯川晃敏

中村星湖（なかむら せいこ）

鈴木三重吉 中村星湖宛書簡 1929（昭和4）年9月7日
中村星湖「魚の番人」原稿
中村星湖「西湖の鱒」草稿
中村星湖「わか園の葡萄は青く渋けれと赤らみ熟れむ君巴里に入る頃」色紙
坪内逍遙 中村星湖宛書簡 1914（大正3）年10月4日
「赤い鳥」第13巻第3号 1924（大正13）年9月
中村星湖「少年行」原稿〈複製〉
早稲田文学 第17号 1907（明治40）年5月
中村星湖『少年行』現代代表作叢書第12篇 1915（大正4）年10月 植竹書院

前田 晁（まえだ あきら）

国木田独歩 前田木城（晁）宛書簡 年月不明15日
島崎藤村 前田晁書簡 1942（昭和17）年（推定）7月20日
前田晁「金壺円の原稿料―二葉亭主人のこと―」原稿
吉屋信子 前田晁宛書簡 1915（大正4）年6月4日
田山花袋筆「文章世界」創刊号立案〈複製〉
前田晁『少年国史物語』原稿〈複製〉
小出楯重 画「文章世界」表紙原画〈複製〉

三井甲之（みつい こうし）

三井甲之「うつりやすきこのよのたのしみうたにうたひとはにかたみとせむはたのしき」短冊
インク壺・ペン皿
三井甲之「大伴家持」草稿
三井甲之「山上憶良」原稿
三井甲之「古事記論」草稿
「アカネ」創刊号 表紙原稿 1908（明治41）年2月〈複製〉
長塚節 三井甲之宛書簡 1908（明治41）年（推定）1月8日〈複製〉

中里介山（なかざと かいざん）と山梨

安岡章太郎「果てもない道中記」（1）原稿
安岡章太郎「果てもない道中記」（39）原稿
中里介山「著作権と模倣、剽窃、侵害」原稿
中里介山 後閑林平宛葉書 1923（大正12）年1月1日
中里介山『大菩薩峠』1918（大正7）年11月 玉流堂
中里介山「大菩薩峠 他生の巻」原稿〈複製・原本 日本近代文学館蔵〉
中里介山「大菩薩峠 流転の巻」原稿〈複製・原本 日本近代文学館蔵〉
「隣人之友」通巻84号 1933（昭和8）年12月
「大菩薩峠」完結編台本
「大菩薩峠」新国劇パンフレット

伊藤左千夫（いとう さちお）と山梨の歌人たち

伊藤左千夫 岡千里宛書簡 1911（明治44）年12月11日
日原無限「時雨空霽れなむとする雲の色彼の雲の色よ君が心に」一枚物
神奈桃村「岩窟のおくまところ真かゝやく黄金の像一寸八分」短冊
神奈桃村 岡千里宛葉書 年不明3月10日
伊藤左千夫「敷妙の家のうちとの物みなのかよきにきほひ咲ける花かも」短冊

伊藤左千夫 岡千里宛書簡 1905（明治38）年7月2日
伊藤左千夫 岡千里宛葉書 1906（明治39）年8月3日消印
神奈桃村「岩窟に安置されたる百体の石の看音見てまわりけり」短冊
日原無限ほか「楓會（題苔）」原稿
伊藤左千夫 岡千里宛葉書 1906（明治39）年9月22日
伊藤左千夫 岡千里宛葉書 1906（明治39）年11月11日
岡千里「あかつきを囀りそめて落椿地上に赤くぬれにみれたり」短冊
岡千里「落椿みだれて赤き花屑に日輪黒くはめてある如し」短冊
神奈桃村「岩窟に安置されたる百体の石の看音見てまわりけり」短冊
日原無限「真鏡と空澄渡りはらはらと木の葉を拂ふ初冬の風」短冊
伊藤左千夫 岡千里宛葉書 1906（明治39）年1月12日
伊藤左千夫 岡千里宛葉書 1912（明治45）年2月19日消印
神奈桃村「紫芋をかこひ穴よりとりいだし芽あるとなしを選びわけりかも」短冊
「馬酔木」第3巻第2号 1906（明治39）年2月
「馬酔木」第3巻第6号 1906（明治39）年10月

秋山秋紅蓼（あきやま しゅうこうりょう）

秋山秋紅蓼「バラの咲いた朝で夢の話をしてゐる」短冊
秋山秋紅蓼 水彩画「銀座大增の大福」
秋山秋紅蓼「ぶどうの房」句稿
秋山秋紅蓼 水彩画「秋刀魚」1956（昭和31）年9月20日
秋山秋紅蓼 スケッチブック
秋山秋紅蓼「自由律精神について」原稿
秋山秋紅蓼「炭火」句稿
秋山秋紅蓼「きいろいのみものがすゞしく遠ういなづま」色紙
秋山秋紅蓼 素描「獅子」
秋山秋紅蓼「文楽人形」スケッチ 1938（昭和13）年7月16日
秋山秋紅蓼「俳句四格調の説—自由律の限界と新表現の設定」原稿（複製）
秋山秋紅蓼『兵隊と桜』1940（昭和15）年1月 沙羅書店

田中冬二（たなか ふゆじ）と山梨

田中冬二「もうちき春が来る」草稿
田中冬二「文楽人形」スケッチ
田中冬二「きいろいのみものがすゞしくて遠ういなづま」色紙
田中冬二「香水の人を忘れず軽井沢」短冊
田中冬二「ラムネのやうな空気の村へ行かうよ…」色紙
田中冬二「薬師寺秋思」草稿
田中冬二「香水の人を忘れず軽井沢」短冊
田中冬二「雪女郎の銀の簪ひろひたる」短冊
田中冬二「冬日薄暮」色紙
落款印影
万円筆
田中冬二『青い夜道』1929（昭和4）年12月 第一書房

木々高太郎（きぎ たかたろう）

木々高太郎「文学に於ける実感に就て」原稿
江戸川乱歩 木々高太郎宛書簡 1935（昭和10）年8月8日
木々高太郎「雨と殺人」原稿
小栗虫太郎 林麟宛葉書 1937（昭和12）年2月10日
「文藝春秋」第15巻第3号 1937（昭和12）年3月
木々高太郎『人生の阿呆』1936（昭和11）年7月 版画荘

木々高太郎『笛吹』1948（昭和23）年3月 世界社
木々高太郎「笛吹 ―或るアナーキストの死」草稿〈複製〉
「シュピオ」第3巻第4号 1937（昭和12）年5月
林麟『頭よくなる本』（カッパ・ブックス）1960（昭和35）年10月 9版 光文社

小尾十三（おび じゅうぞう）

小尾十三「青い林檎」草稿
小尾十三「親子だるま」原稿
小尾十三「からすの親子」草稿
小尾十三「しつけ糸」原稿
「文藝春秋」第22巻第12号 1944（昭和19）年12月
小尾十三『雑巾先生』1945（昭和20）年2月 満洲文藝春秋社
芥川賞記念品の腕時計
小尾十三「母への反抗時代」原稿〈複製〉

村岡花子（むらおか はなこ）

村岡花子「子どものことば」原稿
村岡花子「弁天池―K夫人のことども―」原稿
村岡花子「初めての本」原稿
村岡花子「昔のこと、今のこと」原稿
村岡花子「赤毛のアン」第4章翻訳原稿〈複製〉
村岡花子「赤毛のアン」第5章翻訳原稿〈複製〉
村岡花子『赤毛のアン』1952（昭和27）年5月 三笠書房
モンゴメリ『ANNE OF GREEN GABLES』〈複製〉
村岡花子『ヘレン・ケラー 20世紀の奇跡』1964（昭和39）年3月 偕成社
村岡花子『随筆集 心の饗宴』1947（昭和22）年11月 花書房

徳永寿美子（とくなが すみこ）

徳永寿美子「子供と童話」草稿
徳永寿美子「小公子」原稿
徳永寿美子「雲をながめる」草稿
徳永寿美子「たこたこ あがれ」原稿
徳永寿美子『薔薇の踊り子』1921（大正10）年2月 アルス〈複製〉
「母」第6年第8号〈複製〉
徳永寿美子「小公子」翻訳原稿〈複製〉
徳永寿美子『小公子』1948（昭和23）年5月 広島図書
徳永寿美子『フランダースの犬』1965（昭和40）年12月 盛光社

八木義徳（やぎ よしのり）と山梨

八木義徳「甲州と私」原稿
八木義徳「系図」原稿
八木義徳「夢のかけ橋成る」原稿
八木義徳「美しき晩年のために」原稿
八木義徳『母子鎮魂』1948（昭和23）年3月 世界社
「満洲観光聯盟報」第5巻第6号 1941（昭和16）年6月
『八木義徳全集』第1巻 1990（平成2）年3月 福武書店 妻正子に宛てた献辞入
『八木義徳全集』第3巻 1990（平成2）年5月 福武書店 妻正子に宛てた献辞入
『八木義徳全集』第4巻 1990（平成2）年6月 福武書店 妻正子に宛てた献辞入

武田泰淳（たけだ たいじゅん）と山梨

武田泰淳「いりみだれた散歩」原稿

武田泰淳「汗をかく壁」原稿

司修『富士』挿絵エッチング

武田泰淳「わが子キリスト」原稿（複製）

武田泰淳『富士』1971（昭和46）年11月 中央公論社

「海」第8巻第12号 1976（昭和51）年12月 武田泰淳追悼特集

李良枝（イ・ヤンジ）

李良枝「かずきめ」草稿

ソウル大学卒業証書 1988（昭和63）年2月26日

李良枝「由熙」草稿

李良枝『由熙』1989（平成元）年2月 講談社

第100回芥川賞正賞懷中時計

李良枝「石の聲」草稿

李良枝『石の聲』1992（平成4）年9月 講談社

愛用の筆筒・文具

辻 邦生（つじ くにお）と山梨

辻邦生「ある生涯の七つの場所 祭の果て」原稿

辻邦生「シェイクスピア「ソネット」吉田健一訳の一節」色紙

辻邦生「埴谷雄高氏との出会い」原稿

辻邦生「含羞のエロス」（「蛇笏の一句」）原稿

辻邦生「南イングランドの印象から」原稿

「海」創刊特大号 1969（昭和44）年7月

「新潮」1982（昭和57）年2月

辻邦生『背教者ユリアヌス』1972（昭和47）年10月 中央公論社

辻邦生『銀杏散りやまず』1989（平成元）年9月 新潮社

第3室 芥川龍之介

【大川の水（誕生・少年期）】

伯母のふきが使った長唄稽古本

「牛乳の用法」パンフレット 1904（明治37）年11月 耕牧舎

芥川龍之介「義仲論」原稿

写真パネル 実父・新原敬三

写真パネル 養父・芥川道章

写真パネル 実母・ふくと龍之介

写真パネル 左から養母・とも 伯母・芥川ふき 叔母・新原ふゆ

【空中の火花（文壇登場）】

菅虎雄筆「我鬼窟」扁額（複製）

芥川龍之介「鼻」草稿（複製）

「新思潮」創刊号 1916（大正5）年2月

芥川龍之介「葬儀の記」原稿（複製）

芥川龍之介「秋」草稿

芥川龍之介『傀儡師』1919（大正8）年1月 新潮社

芥川龍之介『点心』1922（大正11）年5月 金星堂

芥川龍之介『支那遊記』1925（大正14）年11月 改造社

写真パネル 左から久米正雄、松岡譲、龍之介、成瀬正一

写真パネル 餓鬼窟で。1921（大正10）年 南部修太郎

写真パネル 中国服を着た龍之介と竹内逸三

【ぼんやりした不安（苦悩と死）】

久米正雄 芥川龍之介宛書簡 1926（大正15）年7月26日消印
芥川龍之介『近代日本文藝読本』縁起 原稿
芥川龍之介「玄鶴山房」草稿
芥川龍之介筆「澄江堂十首」卷子（複製）原本 天理大学附属天理図書館蔵
『近代日本文藝読本』全5巻 1925（大正14）年11月 興文社
芥川龍之介『湖南の扇』1927（昭和2）年6月 文藝春秋社出版部
芥川龍之介「文芸的な、余りに文芸的な」原稿（複製）
芥川龍之介「或阿呆の一生」原稿（複製）
写真パネル 1927（昭和2）年5月24日「現代日本文学全集」（改造社）の宣伝講演会を行った新潟高等学校で
写真パネル「時事新報」1927（昭和2）年7月25日

【書画の魅力】

芥川龍之介 谷崎潤一郎宛書簡軸装 1922（大正11）年（推定）6月4日
『黄雀風』表紙校正刷り
芥川龍之介筆「風にまひたる菅笠の」額装
芥川龍之介画「朝鮮半島の地図」「とうもろこし」
芥川龍之介「野茨にからまる萩のさかりかな」色紙額装
『黄雀風』見返し原画と扉題字
芥川龍之介 斎藤貞吉宛書簡 1921（大正10）年7月21日（年月推定）
芥川龍之介「亀」スケッチ

【芥川の俳句】

芥川龍之介「春雨や霜に焦げたる杉ながら」ほか俳句草稿
芥川龍之介「金を練る竈も古りて蚊食鳥」ほか俳句草稿
芥川龍之介「咲きたらぬ庚申薔薇を青嵐」ほか俳句草稿
芥川龍之介「蝙蝠や灯入りの月に人ふたり」ほか俳句草稿
芥川龍之介「舟牢にからむ藻草や蚊食鳥」ほか俳句草稿
芥川龍之介「麥あらしすさびそめけり暮れにけり」ほか俳句草稿
芥川龍之介「松江連句」草稿
芥川龍之介「たばこすふ煙の垂るる夜長かな」ほか俳句草稿
芥川龍之介「ゆれ落つる月の赤さよ檜ヶ嶽」ほか俳句草稿
芥川龍之介「雁啼くや芥火燃ゆる裏河原」連句草稿
芥川龍之介「山もとの夜長を笠のゆくへかな」ほか俳句草稿
芥川龍之介「盆梅の枝にかかるや梅のひげ」俳句草稿
芥川龍之介「土雛や鼻の先から日の暮るる」俳句草稿
芥川龍之介 飯田蛇笏宛書簡 1923（大正12）年12月1日（複製）
飯田蛇笏 芥川龍之介宛書簡 1926（昭和元）年12月29日（複製）
「雲母」第13巻第9号 1927（昭和2）年9月
『澄江堂句集』1927（昭和2）年12月 文藝春秋社

【芥川と山梨】

芥川龍之介「藤の花軒端の苔の老いにけり」軸装（複製）
芥川龍之介「水虎晩歸之図」軸装（複製）
芥川龍之介 山本喜誉宛書簡 1910（明治43）年10月14日（複製）
芥川龍之介 山梨夏期大学講演メモ（複製）
堀内柳南「コスモスを揺して月に来る人」軸装
堀内柳南「虫なき出し夕くれの母の言葉」軸装